

平成22年6月28日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530760

研究課題名（和文） 大学類型による女性の職業キャリア分化に関する研究

研究課題名（英文） Research on the woman's occupation career differentiation which depends on the university pattern

研究代表者

中村 三緒子（NAKAMURA MIOKO）

日本女子大学・人間社会学部・学術研究員

研究者番号：70440089

研究成果の概要（和文）：高学歴女性の結婚・出産後の職業キャリア分化の規定要因を分析するため、首都圏の女子大学と共学大学を卒業した35～45歳の女性を対象に調査を行い、大学類型別の大学教育や母親の影響が職業キャリアに与える影響を分析した。分析の結果、「大学時代の専門知識・技術を生かせる業務である場合」や「母から仕事を続けるように子どもの頃から言われていた場合」に就業を継続する傾向が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study analyze a factor of women's career who graduated university. It investigated for women of 35-45 years old from the women's university and the coeducation university in the metropolitan area. As a result of the analysis, women who continue operation were able to use of their expertise at university days and has been said by their mother to keep working since the child.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	400,000	120,000	520,000
2008年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育社会学

キーワード：教育学、社会学、ジェンダー、職業キャリア、高等教育

1. 研究開始当初の背景

大学進学率の上昇に伴い、女子高校生の大学への進学意識は教養志向から職業志向に変わり、共学大学への進学志向が強まっている（牧野 1998,1999）。しかし、大学は研究機能に応じて5つのタイプに分類され、各大学群毎にグループとしての特性が異なる。どのタイプの大学に進学するかによって受け

られる教育や就職先の傾向も変わってくる。また、女子の場合には大学に進学する理由としてよりよい結婚の機会を得ることもあげられる（矢野 1996）。そのため、女性の場合は、どのタイプの大学に進学したかによって、卒業後の就職先や職業キャリアが変わるだけでなく、どのタイプの大学出身者と結婚するかによっても、将来のライフコースは

異なると考えられる。

2. 研究の目的

大卒女性の職業キャリア分化には、夫の収入や学歴などの説明だけでは不十分であり、大学の教育が影響を与えていることを明らかにする。

共学大学出身者の場合は大学類型（研究大学、大学院大学、準大学院大学、修士大学、学部大学など）、女子大学出身者の場合はさらに大学の教育理念が、未婚期の職業キャリアと生活、結婚・出産後の職業キャリア分化に影響を与えることを明らかにする。

職業キャリアの変化を検討することで女性の就業に必要な高等教育や労働政策、人事労務管理の課題を考えることができる。

3. 研究の方法

1986年～1996年に大学を卒業した女性を対象に職業キャリア分化に関する調査研究を行った。

調査対象は、首都圏にある男女共学大学のうち10大学と7女子大学を卒業した女性である。偏差値を考慮し大学類型に偏りがでないように工夫した。

4. 研究成果

本研究は高学歴女性の結婚・出産後の職業キャリア分化の規定要因を分析することを目的としていた。本研究では、首都圏の女子大学と共学大学を卒業した35～45歳の女性を対象に調査を行い、大学類型別の大学教育や母親の影響が職業キャリアに与える影響を分析した。

(1) 大卒女性の職業キャリア分化を詳細に把握するため、「中間的女子大学」出身者と「共学大学」出身者に、大学卒業後から現在までの職業キャリアについてインタビューを行った。中間系女子大学出身者は就業を継続する者と専業主婦になる者が多いと考えられ、ライフコースは大学の発するメッセージからの影響を受けると先行研究では指摘されてきた。中間系女子大学出身者へのインタビューから、高校・大学時代を通して、将来のライフコース展望はあまり強くもっていなかった。彼女らは大学の発するメッセージよりも母親や周囲からの影響が大学卒業後のライフコースに強く影響を与えていることを明らかにした。Aさんは、お母様から保育園の子どもと幼稚園の子どもでは〇〇が違うのは、母親が働いているかどうかの違いだから・・・というようなことをいつも言われていたため、自分の子どもは自分が責任をもって育てるようにいわれてきた。そのため、就業継続を考えたことはなかった。一方、Bさんは本当は仕事を続けるあるいは、関連分野の仕事をしたいと思っても、会社や職場環境が就業継続を認めない状況であったため、仕事を継続できなかった。これ

から、宅検の資格をもっているため、不動産屋でアルバイトをすることもできるが、そのような仕事をしたいわけではないが仕事はしたいと思いつけている。このように思うのは、できたら仕事は続けたいと漠然と思っていたお母様からも漠然とそのようなことを言われていたことが影響している。

女性のライフコース分化は、母親や周囲のアドバイス、職場の就業条件などさまざまな要因によるところが大きいが、大学で学んだことを活かすことのできる職場や仕事などができるような環境整備が必要である。

(2) 職業系女子大学、中間系女子大学、教養系女子大学、共学大学の卒業生調査を行った。これらのデータを合わせた1601票の分析を行った。有配偶者を35-39歳、40-41歳、42歳以上の3グループに分けて、職業キャリアが分化する要因を検討した。全ての年齢層において、「大学時代の専門知識・技術を生かせる業務である場合」、「子どもの頃から母から仕事を続けるように言われていた場合」、「初職」が「専門・管理職である場合」、就業を継続する「継続型」が多い結果であった。一方、「子どもが小さい間は、母親は仕事を持たず家にいる方がよいと思う場合」、結婚・出産で一時退職後に再び就業する「再就業型」や結婚・出産で仕事を退職する「退職型」が多い結果であった。35-39歳と42歳以上グループでは、「転職しながら専門・得意分野を形成した場合」は「継続型」が多い結果であった。また、大学類型別では、職業系大学出身者と共学大学出身者の場合、母親が就業を継続し、本人も就業を継続している傾向があった。女性の就業継続は、職場環境の影響も大きいと思われるが、「子どもの頃から母親から仕事を続けるように言われていた」ことが強く影響していることがインタビューだけではなく、統計的な分析の結果からも明らかになった。

(3) 職業キャリア分化と専門知識や母親との関係をより詳細に考察するため、大学卒業後に専門学校で勉強する女子学生（未婚者と有配偶者）にライフコース展望についてインタビューを行った。幼児教育の専門学校に在学する短大・大卒者が専門学校に進学する理由には、大きく分けて3つのタイプが存在する。第1に、大学では幼児教育とは異なる専門分野を学んだ後、実践的な技術を学ぶことを優先して専門学校にした実技優先タイプ。第2に、就職支援や就職率の高さを重視した就職重視タイプ、第3に周囲の人々から専門学校を紹介された専門学校紹介タイプとに分けられる。

専門学校は大学に進学できなかった者の進学先と考えられていたが、短期大学や大学

卒業後に専門学校に入学した学生へのインタビューから専門学校は高校生が資格取得を目的に進学する機関だけではなく、短大・大卒者が実践的な勉強と資格取得を目的に進学する機関でもある。短大や大学卒業後に専門学校に進学する学生は、大学とは異なる専攻を卒業後に実践的な勉強と資格取得を期待して、専門学校に進学していた。幼児教育や保育といった短大や大学にも編入や学士入学などで学ぶ道があるにもかかわらず、専門学校に進学する理由は、既に短大や大学で勉強しているからこそ、大学在学中に受けた講義や研究内容ではなく、専門学校では実践的な実技と就職支援を特に期待しているといえよう。また、大学時代の経験があったからこそ、専門学校に進学しようと思っていたことが明らかになった。

母親の影響に注目すると、母親が保育士や教員の場合は、母親の働く姿や職場の話を子どもの頃から聞いてきたために、母親と同じあるいは類似した仕事に最終的に就くことを目指していた。大学が就職活動に熱心だったことや公務員として働く環境が整っている場合は就業継続を目指していた。一方、母親が専業主婦の場合、母親から資格の重要性を子どもの頃から聞かされていたため、その資格を有効に使用したいと考え、結婚や出産などで仕事を辞めても資格を活用したいと考えている。また、母親が専業主婦のために保育園に関する理解が十分でないことや保育園に子どもを預けて働く母親に対する偏見を自分自身も持っているために就職先や働き方に影響を与えていた。母親の子どもへの接し方が子どもの人生設計に大きな影響を与えると考えられる。

短大や大卒女性に関する研究は、卒業後女性には継続就業する者、結婚出産後再就業する者、結婚出産後退職（専業主婦）する者が存在し、卒業後のライフコース分化について経済学や社会学などの分野でその要因や結果について議論されてきた。短大・大卒女性には資格を重視し、専門職としての将来展望をもつために、短大や大学卒業後に改めて専門学校に進学して勉強する学生が存在していることである。彼女らは大学で専門職の資格取得を目指すのではなく、実践的な勉強ができること、就職支援、就職率の高さを考慮して専門学校に進学していた。実践的な実技は大学や短大では期待できないことが短大・大卒者が専門学校に進学する要因と思われる。幼児教育や保育関係の職場は女性の就業率が高い職場であるため、短大・大学卒業後に改めて資格取得を目指しやすい仕事かもしれない。今後は短大や大学卒業後に短大や大学ではなく、専門学校に進学する者は増加するものと思われる。女性が短大や大学でキャリア教育を実践できるような環境の整

備が求められる。

(4) キャリア教育は「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育」と定義づけられている。特に、職場体験やインターンシップなどの体験活動には、勤労観、職業観の育成、学ぶ事への意義の理解と学習意欲の向上等様々な教育的効果が期待され、現実立脚した確かな認識をはぐくむ上で欠かすことのできないものであるとされている。

従来の教育社会学の研究では、高校生の意識と卒業後の進路は高校の序列の影響を強く受けているとされてきた。学力が低く、大学進学率の低い高校の生徒は地位の低い職業を選択し、自分の将来や学校生活に対する意欲が低く、私生活重視の態度を形成する。しかし、近年では職業選択や進路選択についての学校の規定力が弱くなっているという。また、職業達成そのものに対する意識も変化している。

このような現状に対して、「キャリア教育」の必要性が高校段階からではなく、小学校段階から発達段階に応じて実施される必要性が指摘されてきた。「キャリア教育」が実施されているにもかかわらず、職業達成意識が変わっていない要因を検討するため、職業達成意識と強い関係があると考えられる専門学校に通う学生に将来展望とキャリア教育の経験などについてインタビューを行い、キャリア教育と将来展望との関係を明らかにした。中学生が多く希望する「保育士」資格と「幼稚園教員」免許を取得できる専門学校に在学する1年生に中学時代のキャリア教育についてインタビューを行った結果、専門学校の学生は、中学2年で「職場体験」としてキャリア教育を体験しても中学時代の「キャリア教育」がそのまま将来の職業に結びついているわけではなく、「職場体験」が進路選択や進路決定に影響を与えているとは言い難い。資格を重視する学生も中学時代の職場体験で、幼稚園や保育園に行ったケース、行かなかったケース両方見られるが、中学時代の職場体験が将来の進路選択に影響を与えているわけではなかった。子どもと遊ぶことを期待して入学した学生も、中学時代に幼稚園や保育園で職場体験をしていて、子どもと遊んで楽しかったことが、高校卒業後の進路として、保育士や幼稚園教員養成校に進学するという進路選択には多少なりとも影響を与えていた。しかし、「職場体験」がなくても彼女たちは専門学校に進学したと考えられる。

インタビューを行った学生のうち、「職場体験」をきっかけに進路選択あるいは進路を決定したとは言い難い。文部科学省が推進す

る「キャリア教育」は、児童生徒にふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育がなされているのだろうか。中学時代に「キャリア教育」を体験した専門学校生から「キャリア教育」の効果があつたかは非常に疑問が残る。これは、中学時代に「職場体験」を体験できる職場に限界があるためなのか、子どもたちのイメージする仕事と実際の仕事である現実が異なるためなのか、今回の聞き取り調査だけでは十分に明らかにすることはできなかった。キャリア教育の効果をより詳細に検討するには、専門学校生だけではなく、短大・大学生などさまざまな種類の学生にキャリア教育と将来の希望職業とライフコース展望との関係を聞き取り調査や質問紙調査を用いて明らかにしていくことが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①中村三緒子、専門学校に関する研究、日本女子大学人間社会研究科紀要、査読無、16、2010、41-54。

②中村三緒子、キャリア教育の効果、日本女子大学人間社会研究科紀要、査読無、15、2009、213-225。

③中村三緒子、大卒者の進路変更、日本女子大学教育学科の会「人間研究」、査読無、45、2009、35-44。

④中村三緒子、大卒女性のライフコース分化の規定要因、日本女子大学人間社会研究科紀要、査読無、14、2008、43-56。

⑤中村三緒子、子どもの成長・進路に母親と学校が与える影響、日本女子大学教育学科の会「人間研究」、査読無、44、2008、27-35。

[学会発表] (計1件)

中村三緒子、幼児教育希望者の就業意識、日本子ども社会学会、2009年7月5日、中国学園大学(岡山県)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 三緒子 (NAKAMURA MIOKO)

日本女子大学・人間社会学部・学術研究員

研究者番号：70440089